

特集 語り継ぐ戦争と平和

少年少女たちと戦争

第二次世界大戦の終戦から73年が経ちました。満州事変（1931年）から始まり、日中戦争、太平洋戦争と続いた15年間の戦争では潮来市民にも多くの戦没者（843名）を出し、遺族は大変辛い思いをしました。戦争で傷ついて復員してきた方、空襲で死傷した方、満州や外国で終戦を迎え、大変な苦勞をして帰国した方もいます。

当時は今では想像もできない位、大変な食糧難で、子供も大人も飢えに苦しみ、食べられるものは何でも工夫して食べたといいます。物資も不足し、農作物だけでなく、武器にするための金属類や綿も供出の対象となりました。敗戦後、日本を占領したアメリカ軍の方針で戦争の遺族や負傷した軍人への補償が打ち切られた時代もあり、戦争が終わっても日本人の苦難の時代は長く続きました。

戦争の体験のある方々は高齢になり、語り部も少なくなりつつあります。そして今を生きる私達は実際に戦争を体験した方から直接話を聞ける最後の世代です。今回は戦争中、少年少女だった市民の体験を中心に話しをお聞きしました。体験談から平和な未来について改めて考えてみるのが大切ではないでしょうか。

満蒙開拓団を経てフィリピンで戦死した父

石井貞夫さん（島須地区・昭和10年生まれ）

父親（石井誠さん・明治43年生まれ）は兵隊になるつもりはなかったようですが、体が丈夫でスポーツ万能だったため、鹿島農学校（現鹿島高校）を卒業後、日中戦争へ徴兵されました。支那事変で敵に砲撃された時に軍服のボタンに銃弾が当たり、怪我はしましたが、九死に一生を得て復員してきました。その後母と結婚。子供4人（一男、三女）に恵まれました。昭和16年に満蒙開拓団で教師として満州に渡り、昭和19年に帰国、内原にあつた満蒙開拓青少年義勇軍（※）の教師となり、農業の指導をしていましたが、昭和19年6月に再び徴兵されました。出征し、広島から台湾を経て南方に向かい、12月にフィリピンのレイテ沖で乗っていた船が沈んで戦死しました。父を最後に見送ったのは暑い日だったのを覚えています。父は戦況が良くないことを分かっていたようで「日本は負けるかもしれないので、自分は生きて帰れないかもしれない」と親戚に言い残していたそうです。遺骨はもちろん戻らず、戦死の報告の紙一枚入った箱が届いただけです。

叔父（父の弟）も出征してサイパンで戦死しました。父の妹の夫、母の弟もフィリピンで戦死しています。父を戦争で失い、祖父と母も亡くなったから長男だった私は学校に行きながら家を守りました。組内の行事や葬式なども中学生のころから家の代表として出ていました。

玉音放送は家にラジオがあつたので家族で聞いた記憶があります。雑音が多く、何を言っているのかわからなかったのですが、日本が負けたことだけははっきりと分かりました。

苦勞した思い出はやはり食べ物です。米は少なく、サツマイモやジャガイモ、芋がらなど何でも食べました。当時のカボチャは今のようないかいカボチャではなく、とても不味いものだったので他に食べ物がないので仕方なく食べていました。今は違つと分かっていますが当時のことが思い出されて、カボチャは食べるのが出来ません。

（※）満蒙開拓青少年義勇軍 昭和17年以降行われた15から18歳の青少年を満州国に開拓民として送出する制度。茨城県の内原訓練所（水戸市）で全国から集められ2カ月の訓練を行い、満州へ送られた。参加した青少年は敗戦までの8年間に8万6千人にのぼる。

出征した兄たちと戦時中の思い出

坂本 照子さん（牛堀地区・昭和11年生まれ）

私は11人兄弟の末っ子で、物心ついたときはすでに上の兄たちは戦争に行っていて家にいませんでした。長兄は国内で従軍、次兄が満州、四兄と六兄は中国へ出征、五兄がペリリュー島で戦死しています。八兄は麻生中学（現高校）の学徒動員で阿見の予科練で終戦を迎えました。兄弟で唯一戦死した五兄が出征するときだけは、不思議と覚えていて、近所の女性たちが白い割烹着にタスキ姿で集まってくれて、戦地に向かう五兄を見送っていました。戦後、五兄と同じ隊にいた方が訪ねてきてくれて、戦死したときに生き残った方が家族に伝えるため、遺品を交換していたのだそうです。その方が前線を離れた直後に玉砕があり、五兄は帰らぬ人となりました。家には戦死の報告と紙に包まれた砂が箱に入って届きました。

次兄は満州で敗戦を迎え、3年間ソ連に抑留され強制労働に従事しました。後世、戦争中の体験は決して語ることはありませんでしたが、亡くなってから抑留中のことや日本に帰国できた時の思いが綴られた日記が見つかり、改めて読み返して次兄の苦難の体験を知り、胸が詰まりました。戦友との親交あつく、満州の人たちも分け隔てなく接していた亡き兄を今も誇りに思います。あの頃、幼かった私達は空襲や敵の攻撃に怯えながら毎日を精いっぱい生きていました。だからこそ年月がたっても鮮明に子供の頃のことを覚えているのでしょう。八兄が予科練で出た乾パンと当時は貴重品だった金平糖を妹の私達のために食べずに我慢をして持って帰ってきてくれて、それが嬉しくてたまらなかつたこと。防空頭巾をかぶって爆撃を避けて山の中を通学したこと。ジャガイモ飯やすいとんが主食で採れるお米も供出が主で、食べていたのは麦めしです。当時、東京にいた叔母が食料の調達によく来ていたのですが、お米が持ち帰れなかつた（電車の中で検閲がある）ため、帯枕にお米を隠して体に巻いて持ち帰っていました。今はとても恵まれていて幸せな時代、孫たちにも食べ物の大切さ、戦争の悲惨さを折に触れて話して聞かせています。

戦争で亡くなった友人達

飯田 富美男さん（大生原地区・昭和4年生まれ・高齡者クラブ連合会会長）

父が北浦海軍航空隊の仕事に就いていたので、小学生のときに東京から転入してきました。自分は剣道が強かつたので、国民高等学校の卒業の時（今の15歳）先生から海軍の少年航空兵になるように勧められました。そのころは兵隊さんになるのは当たり前、親に相談せずに願書の書類に判子を押し提出しようとしたところ、母親に見つかつて「長男なのだから兵隊に行くのはやめて」と止められてしまいました。同級生で一番仲の良かった大津三郎君は卒業を待たずに2月に海軍に入隊し、その後、間もなく戦死しました。彼のことを思うと今もとても悲しく、残念です。そして自分も入隊していたら生きて帰る望みは少なかつただろうと思います。

国民高等学校を卒業した私は昭和19年の4月に第一海軍航空隊に入り、土浦の軍事工場に行きましたが、戦争が激しくなり、航空工学の勉強どころではなく、毎日奉仕作業をしていました。古くなつた飛行機の機材や部品を洗ったり、冬は水が冷たくあかぎれが切れて皮も剥け激痛でした。食べ物もなく、大豆のカスや不味いサツマイモを食べていました。たまに潮来の実家に帰ると米を炊いてくれるのがうれしくて、親がびっくりするくらい夢中で食べていましたね。工場の寮は1部屋8人、私は部屋長をしていましたが、ある日、友達が二人帰ってこないのです。みんなで心配していたところ、爆撃に遭って大けがを負い、病院にいたという知らせが入りました。結局二人とも亡くなつたのですが、埼玉から駆け付けた彼らの親に（亡くなつた）報告したこと、その時の親御さんの悲しむ様子は今も忘れられません。戦争では友達が若くして次々と死んでいった、本当に辛いことです。

当時は一週間おきに爆撃があり、山の中で米軍の機銃掃射に遭つたときはわらの中に逃げ込んで難を逃れたり、空襲はもう日常茶飯事で、当時の少女少女はみんなそれは大変でした。終戦の玉音放送は工場の従事者が集められて山の中で聴きました。暑い日でした。放送は雑音が多かつたのですが「耐えがたきに堪えて忍び…」の部分だけははっきり聞こえて、ああ、日本は負けたのだとその時実感しました。